

大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：小林 大介（臨床心理研究コース）

■ 研究題目
青年期のカップル間における情報量の差と攻撃行動に関する研究
■ 研究代表者・分担者 氏名
小林 大介（臨床心理研究コース）（研究代表者） 安藤 樹（臨床心理研究コース） 斎藤 昭宏（臨床心理研究コース） 関口 湊人（臨床心理研究コース） 進藤 果林（臨床心理研究コース）
■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）
<p>1. 問題と目的</p> <p>内閣府(2015)によると、平成 26 年度においては男性の 10.6%、女性の 19.1%が交際相手からの暴力被害を受けていることが明らかとなっており、大学生においても約 20%～50%の比率で未婚カップルにおける暴力であるデート DV を経験していることが指摘されている(深澤ら, 2003 ; 寺島ら, 2013)。このような攻撃行動に関する心理的要因としては、低い自尊心や嫉妬、怒り特性、アタッチメント不安、ストレスが指摘されている。その一方で、攻撃行動を止めるための介入に関する研究は十分ではない。そこで、本研究では、暴力はカップル間の関係性によって生じる(Herman,1992 ; 伊田, 2010)という指摘に着目し、攻撃行動が生じる関係性を明らかにし、その関係性に対する介入方法を検討することを目的とする。</p> <p>まず、カップル間の関係性を測定するために社会的勢力に着目した。社会的勢力とは「他者の行動、態度、感情などを影響者が望むように変化させる能力」(French & Raven,1959)であり、French & Raven(1959)は「参照勢力」「専門勢力」「正当勢力」「報賞勢力」「罰勢力」の分類を行い、今井(1986)が「魅力勢力」を追加している(Figure1)。本研究では、この社会的勢力の認知に関して、相互作用の視点から、相手と比較して自分が所持している社会的勢力に着目した。従来の研究では、相手の社会的勢力の認知に主眼が置かれていたが、関係性を評価する際は、自分が所持する社会的勢力に関しても併せて検討する必要があると考えられる。</p>

続いて、関係性への介入の手がかりとして Foucault(1975)の「知=権力」の理論を取り上げる。Foucault(1975)は、その著書「監獄の誕生」の中で、一方的な知の集中によって周囲を効率的に統制することが権力であると指摘しており、若島(2006)はこの Foucault における「知」は情報と情報の蓄積を意味すると指摘している。本研究では、これらの知見に基づき、臨床的な場面において操作可能な概念として、情報量の差を仮定した。以上の点を踏まえ、本研究では、まず、情報量の有利度と各社会的勢力の有利度・カップル間の攻撃行動との関連性を明らかにし、続いて、情報量の有利度と各社会的勢力の有利度がカップル間の攻撃行動に及ぼす影響について明らかにすることを目的とする。

Figure1 社会的勢力の6つの基盤 (French & Raven,1959; 今井,1986)

参照勢力 (referent power)	影響者に対して同一視や理想化する傾向に基づく
専門勢力 (expert power)	影響者に特殊な知識や専門的スキルを持っていることに基づく
正当勢力 (legitimate power)	影響者が行動に影響する正当な権利(立場や年齢)を持っていることに基づく
報賞勢力 (reward power)	影響者が報酬を与える能力を持っていることに基づく
罰勢力 (coercive power)	影響者が罰をもたらす能力を持っていることに基づく
魅力勢力 (attraction power)	影響者との対人関係を維持していきたいと願うことに基づく

2. 実施内容

東北地方及び関東地方の大学生・大学院生 127名(男性 34名, 女性 93名, 平均年齢 20.7歳 SD=1.50)を分析対象とした。質問紙は①フェイスシート(年齢, 性別, 交際経験の有無, 交際期間)②情報量の有利度を測定する尺度(心理学専攻の大学院生 5名で作成)③社会的勢力の有利度を測定する尺度(今井(1987); 今井(1993)の尺度を参考に心理学専攻の大学院生 5名で作成)④カップル間の攻撃行動測定尺度(小泉・吉武(2008)を参考に心理学専攻の大学院生 5名で作成)で構成されている。

3. 結果

(1) カップル間の攻撃行動尺度の因子分析

カップル間の相手からの攻撃行動尺度, 自分からの攻撃行動尺度についてそれぞれ因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った結果, 固有値の減退率と解釈可能性から, 相手からの攻撃行動尺度では, 単因子が妥当であると判断された。また, 自分からの攻撃行動尺度でも単因子が妥当であると判断された。なお, α 係数は, 相手からの攻撃行動尺度は $\alpha=.76$, 自分からの攻撃行動尺度は $\alpha=.75$ と十分な値を示した。

(2) 情報量の有利度と各社会的勢力の有利度・カップル間の攻撃行動との関連の検討

情報量の差と各社会的勢力の有利度・カップル間の攻撃行動との関連を検討するために相関係数を算出した。その結果, 情報量の有利度は, 参照勢力の有利度との間で弱い正の関連があり($r=.35, p<.01$), 専門勢力の有利度との間で弱い正の相関($r=.23, p<.01$),

報賞勢力の有利度との間で弱い正の関連が見られた ($r=.31, p<.01$)。また、罰勢力の有利度との間で弱い負の相関が見られた ($r=-.17, p<.05$)。

(3) 情報量の有利度と各社会的勢力の有利度がカップル間の攻撃行動に及ぼす影響の検討
 情報量の有利度と各社会的勢力の有利度がカップル間の攻撃行動に及ぼす影響を検討するために、相手からの攻撃行動と自分からの攻撃行動をそれぞれ従属変数、情報量の有利度と各社会的勢力の有利度を独立変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。その結果、相手からの攻撃行動に関して、参照勢力の有利度が正の標準回帰係数を示し ($\beta=.30, p<.01$)、正当勢力の有利度が負の標準回帰係数を示した ($\beta=-.18, p<.05$)。また、自分からの攻撃行動に関して、正当勢力の有利度が正の標準回帰係数を示し ($\beta=.25, p<.01$)、報賞勢力の有利度が負の標準回帰係数を示した ($\beta=-.21, p<.05$)。情報量の有利度に関しては、いずれの攻撃行動に対しても影響を与えなかった。

4. 考察

(1) カップル間の攻撃行動尺度の因子分析

本研究で使用したカップル間の攻撃行動尺度は、相手からの攻撃行動尺度、自分からの攻撃行動尺度共に単因子構造であることが示された。原版の尺度である小泉・吉武(2008)が作成した尺度の分類を行った赤澤ら(2011)は、「身体的暴力・脅迫」・「性的暴力・交友監視」・「精神的暴力」の3因子を見出している。本研究で使用した尺度は、この分類の「精神的暴力」に該当する項目が多く含まれており、この点からも単因子の構造となったことが予想される。また、他の項目に関しても、「腹を立てたとき、殴るフリをされる」、「行動を制限されたり、監視されたりする」のように、赤澤ら(2011)の分類上は精神的暴力に該当しないものの、同一の因子にあっても違和がない内容となっている。

(2) 情報量の有利度と各社会的勢力の有利度・カップル間の攻撃行動との関連の検討

検討の結果、相手と比較してより多く相手について知っていることは、相手と比較して自分が憧れや専門性、報賞のようなポジティブな社会的勢力を所持していると認知することと相互に関連していることが示唆された。Gottman(2000)や Troy & Lewis-Smith(2006)は、恋愛関係において相手について理解することは関係性を強固にしたり、関係満足度を高めることを指摘している。本研究の結果を踏まえると、相手について深く知ることによって相手の自分へのポジティブな認知を把握することにつながっていることが示唆された。その一方で、相手と比較して、自分が相手について知れば知るほど、相手の自分に対する罰勢力が増加することが示唆された。本研究のみでは詳細な内容について明らかにすることは難しいが、相手について一方的に知ることによって、相手に困らせられる機会も

増加するのではないかと考えられる。

(3) 情報量の有利度と各社会的勢力の有利度がカップル間の攻撃行動に及ぼす影響の検討
重回帰分析の結果、決定係数が低いため解釈には慎重になる必要はあるが、自分が相手と比較して立場的な勢力が不利で、自分が相手と比較して同一視や理想化に関する勢力で有利であればあるほど、相手からの攻撃行動が増加すること、自分が相手と比較して立場的な勢力が有利で、相手が自分と比較して報酬を与える勢力で有利であればあるほど、自分からの攻撃行動が増加することが明らかとなった。以上の点から立場的な勢力の有利度が相手からの攻撃と自分からの攻撃の両方に影響を与えることが示唆された。また、自分が相手と比較して憧れや同一視の勢力が高い場合、相手からの攻撃行動が高くなることが示唆された。社会的交換理論の衡平理論(Adams,1965)の視点から見ると、相手が自分に対して尊敬の念を示しているにも関わらず、相手は自分からの見返りが得られていないという、不衡平な状態を示しているのではないかとと思われる。加えて、相手の方が自分よりも報賞勢力が高いと認知している場合、自分からの攻撃が多くなるという結果も示された。この結果は、自分は賞を与えないが、相手は自分に対して賞をもたらすと認知している状況では、一方的に賞を受ける側がワンアップになりやすく、相手への攻撃も行なわれやすいことを示しているのではないかと考えられる。情報量の有利度に関しては、どちらの攻撃行動にも影響を与えないことが示された。

5. 今後の課題

まず、攻撃行動の測定に関する課題として、本研究では関係性を考慮せず全ての攻撃行動を一括りに検討したことがあげられる。伊田(2010)は、同じ攻撃行動でも、ある人にとっては暴力となるが、ある人にとっては暴力にならないということを指摘し、その行動が暴力かどうかはカップル間関係性によって定義されると指摘している。今後は、実践的な知見を提供する上でも、より限定的な関係性における攻撃行動に関する研究を行う必要がある。

続いて、情報量の差に関する課題として、本研究では Foucault(1975)の理論に基づき情報量の差を仮定したが、情報量の差を測定する項目の抽象度が高くなったことがあげられる。Gottman(2000)の指摘のように恋愛関係において相手について「知る」ことは適応的な側面も持つ。結果を見ると、本研究における情報量は、この適応的な側面を測定したのだと考えられる。Foucault(1975)における情報量の差は「監視」による「統制」に基づいたものであり、「見る側」と「見られる側」が明確な状況を示している。この点から、Foucaultの理論を明らかにする上でも今後は「監視」に近い項目を測定する尺度の開発が必要である。

また、本研究では、男性のサンプル数が少なく、性差の検討を行うことができなかった。先行研究では、カップル間の攻撃行動に関して性差の存在を示すものもあり(参考として松野・秋山(2009)；森永ら(2011))、今後は男性のサンプル数を増やし、性差に関しても検討を行う必要があるだろう。